

私たちはトータルで見
ればマイナス側の人間
である

鳩胸な鴨

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ワートリにオリジナルのレズ夫婦ブチ込んだだけ。

連載中の小説が行き詰まつたので気分転換に書きました。

目次

ボーダー唯一の『盾』と『ド変態』と『婚姻関係』

約一名、エロ漫画から出てきた可能性あり

1

20

り

ボーダー唯一の『盾』と『ド変態』と『婚姻関係』

「盾臣先輩について…か」

鳥丸京介は、弟子：三雲修の言葉に、普段は最低限しか仕事をしない表情筋を、露骨に微妙なものへと変える。

滅多に見られない師匠の姿に戸惑いながらも、修は言葉を続けた。

「はい。この間、空閑がランク戦をして、一撃も与えられなかつたと…」

言葉を切り、修は先日見た光景を思い出す。

話題に出た少女の持つ武器は、盾にも剣にもなる「レイガスト」。

自身もC級の頃から使用している武装で、正直なところ、人気は皆無なものだ。

理由は簡単。扱いづらいのだ。

基本的に、「もうひとつの中身」とも呼べるトリオン体での戦闘において、一撃がかなり大きなものになる。

だというのに、このレイガスト。

剣であるのに、重量があるせいで、攻撃手段に転じることはほぼ皆無なのだ。一応、スラスターという加速装置があるが、余程上手く扱わないと、敵をぶつた

斬るなんてできない。

思い浮かべて欲しい。

めちゃくちや暴れる馬を乗りこなし、動き回る敵に突撃できるだろうか？

ほとんどの人は、首を横に振るだろう。

では、この武器のメリットは何か。

それは防御面にある。

刃モードから盾モードに切り替えると、とんでもない耐久性を誇るのだ。

盾の耐久値は、人々が持つ「トリオン」の量に比例する。

人より少ないトリオン量の修でも、それなりの防御が可能になるくらいには。

だが、そのメリットも全体で見ると、正直微妙だ。

トリオン体の武装は、銃器以外は重さがあまりないものが多い。

故に、素早い敵にあたれば、ほぼ無力。

先程話題に出た空閑遊真がいい例だ。

残念なことに、ボーダーはそのコンセプトで戦う人間が目立つ。

そんな環境で、わざわざ重い装備をメインで担ぐ人間がいるだろうか。

だというのに、彼女はそのレイガストだけを駆使し、遊真を完封した。

ただし、倒したのではなく、タイムオーバーを狙つて、全戦を引き分けに持ち込んだ。

その光景は、戦闘経験の浅い修でも、異様なものだと理解できた。

聞けば、京介の近所に住むらしく、修は彼から盾臣の情報を聞き出すことにした…といふのが、コレまでの経緯だ。

問われた京介はと言うと、微妙な面持ちのまま、口を開いた。

「あー…。えっと、なんというか…。」

盾臣先輩について説明すると、メンタル削れるからあまり話題にしたくないんだが

…」

京介の言葉に、修は首を傾けた。

「え？いや、そつちじやなくて。」

あの人に戦い方を参考にしようとしたんですけど、僕ではあまり分析できなくて…」

「あ、そつちか」

自分の思っていた話題ではないと知るや否や、京介は表情を元に戻す。
が。即座に先程と同じような顔にもどってしまった。

「…そつちにしても、副作用が絡んでるからダメ、か。：仕方ない」

「えつと、何か気まずいことでも？」

修が問うと、京介は観念したように頷く。

表情筋の動かない師匠をここまで感情豊かにするとは、どんな事情を持つてているのだ

ろうか。

修はそんな好奇心を抱くも、即座に「いや。それは盾臣さんに失礼じゃないか」と思
い立ち、自己嫌悪に陥る。

そんな弟子の様子も気にする余裕がないのか、京介は口を開いた。
「場所を用意するから、会つてみる。

多分、何でもないことのように話してくれるだろ」

◆？◆？◆？◆？

「やあ、キミが三雲くんかな？」

とあるファミレスにて。

三雲修は、目の前の存在にあんぐりと口を開けていた。

一言で言えば、「ずんぐりむつくり」。

夏日だと言うのに、着込みすぎて丸々とした身体。

重ねすぎたイヤーマフにマフラー、さらには帽子が、頭部にも丸みを帯びさせ、どこ
ぞの猫型ロボットのようになつていた。

「はじめまして。

盾臣由紀子、21歳既婚者です」

まさかの情報：少女でもなく、既婚者だつたこと…にさらに口を開けながら、修は

「み、三雲修、です」と、若干震え気味に自己紹介を済ませる。

先日見た姿であれば、美しく艶のある黒髪に、出来立ての陶器ですら霞むほど白い肌が印象的な、儂げな美しさを持つ美人だつたはず。

だというのに、目の前の彼女は、どこからどう見ても『ドラ〇もん』としか例えようのない姿だつた。

「…あの、暑くないんですか？」

ドリンクとハンバーグを注文し、お冷をストローで啜る盾臣に、修が問う。

彼女は飲み干したお冷のお代わりを注ぎながら、あつけらかんと答えた。

「こーしないと『痛く』って、まともに外出れないからね」

「い、痛い？」

その言葉に疑問符を浮かべると、彼女は「あつついあつつい…」と呟きながら、水を飲み干した。

「私の副作用の関係で。

『痛い』ってのが、人百倍くらい感じやすい体質なんだよ。

満足にセツ〇スもオ〇ニーもできない、難儀な副作用なんだあ

「ぶつぶおつ?!」

こんな公共の場でなんてことを言うんだ。

修はそう怒鳴りかけ、気管に入つたお冷を咳き込んで出す。

いくら真面目とは言え、思春期真っ只中の修だ。その程度の性知識はある。盾臣は「あ、ごめんね？」と手を合わせ、ティッシュでそれを拭き取つた。

「んーっと、上の人は『超触覚』って呼んでる副作用でね。

イメージとしては：最近流行りの猪頭の子みたいな感じ、らしーよ？

痛覚もものすごく強化されてるんだけど、そのせいでトリオン体の痛覚遮断が機能しないっぽいんだよね」

「難儀でしょ」と修に同意を求めながら、盾臣は届いたドリンクを素早く飲み干し、店員に追加を注文する。

修は生返事をし、少なくなつた分のお冷を注いだ。

「例えば、ちよつと小さい石が、靴の中に入り込んで踏んじやう…ってあるでしょ？」

三雲くんは、それをどんなふうに感じてるのかな？」

「…違和感がある程度、ですね」

「私の場合は、そこにある皮膚が裂けちゃつたくらいに痛いんだよ」

なるほど。師匠がいい顔をしないわけだ。

あつけらかんと言いながら、追加分のドリンクも飲み干した盾臣に、修は一種の戦慄とも取れる感情を抱く。

しかし、そうなればまた疑問が出てくる。

「なら、なんでボーダーに？」

「副作用の研究でスカウトされちゃって。

こんな体質だから、碌な生活送れてなかつたし、親からも見捨てられてたし、就職も進学も絶望的だつたからいいかなーつて思つて。

あ、ボーダー推薦つてので高校は通つたよ。通信制だけど

「…」、「ごめんなさい」

想像以上に重い話を、他愛のない話のようにして語られた。

修は咄嗟に頭を下げるも、盾臣はそれを止めた。

「別に気にしなくていいよ。

正直に生きてた方が楽しいって、私が勝手に思つてただけだから」

正直過ぎるのもどうかと思う。

少なくとも、公共の場で性交渉と自慰を意味する言葉を口にするのは避けた方がいいのではないか。

それが修の持つ、盾臣由紀子の印象だつた。

「とりあえず、自分語りはこの辺にしといて、今回の本題ね。

私のレイガスト防御術を学びたい…つて話だつたよね？」

盾臣の確認の言葉に、修は首肯する。

こんな性格ではあるが、レイガストの刃先、腕、足を巧みに使い、空閑の攻撃を悉く受け流し、完封した女性。

例え絶望的に教えるのが下手であつても、そこから何かを得ることはできるはず。

修は無意識にシャーペンのメモ帳を取り出し、盾臣の言葉に耳を傾ける。

「まずは前提ね。相手との距離は近距離で、中距離以上は絶対離さない。

射手の三雲くんには厳しいと思うし、団体戦にも向かないスタンスだと思う」

確かに、彼女は空閑がグラスホッパーで距離を取ろうとしたところ、スラスターで食らい付いていた。

近距離の間合いは空閑の⋮果ては彼の使う变幻自在の武器、スコーピオンの得意分野だ。

しかし、彼女は同じ性質を持つレイガストの刃先を上手く変化させることで、スコーピオンの軌道を逸らしていた。

が。それは乱戦が多く予想されるチームのランク戦において、日の目をみるかと言うと、否と言うだろう。

「点を取る、とかじやなくて、焦らすっていうのがレイガスト使い⋮、果ては⋮今のところ私だけしかいないけど、『シールダー』⋮『盾役』の役割だよ。

まあ、私フリーなんだけどね」

盾役。

そんなポジション、聞いたことがない。

盾を使う攻撃手は過去に見たことがあるが、本格的に守りに徹する人間は、あまり見なかつた。

それもそのはず。

ボーダーに求められる技術は「近界民の排除」であり、それが防衛に繋がるのだ。

「トリオン兵：いつもの近界民は、どう相手してんですか？」

「あ、私じゃないの。いつも組んでる子：結婚相手が、攻撃手してくれてるから。

私は防衛任務だと、素敵が役割」

聞けば、その気になれば大気の動きすら掴めるらしく、いくら小型だろうが、姿を消そうが、すぐに分かるらしい。

何時ぞやの異例門騒ぎの時は、風邪を拗らせて寝込み、その解決に貢献することはなかつたとのこと。

そのことを話すも、盾臣は話が脱線しかけたことに気づき、首を横に振つた。

「じゃあ、刃モードと盾モードの立ち回りについて説明するね。

この二つは立ち回りが全然違うから…」

◆? ◆? ◆? ◆?

「空閑先輩、ユキちゃん先輩とランク戦やつたの!?」

「うむ。強かつた。多分、みどりかわと組んでも勝てないと思う」

その頃、ボーダー本部の食堂にて。

緑川駿と空閑遊真は、テーブルを囲みながら、それぞれ机に置かれた料理に舌鼓を打っていた。

ボーダーの食堂の飯はうまい。

あまり良いとは言えない食環境で育ってきた空閑は、大学の学食並みの料理でも、そのように思っていた。

しかし、ボーダーの場合は学食並みではなく、チエーン店並みである。

そのため、空閑はここでの食事を「贅沢」として認識していた。

それもそのはず。

なぜなら、食堂に並んでいるのは、スポンサーの経営するチエーン店なのだから。

「しかし、ユキちゃん先輩とよくコンタクト取れたね？」

あの人、普段からドラ〇もんみたいな格好してるから、あまり近づく人いないんだけど

ど

「こなみ先輩が頼んでくれた」

空閑が思い出すのは、つい先日のこと。

自身の師：小南桐絵が、ふと思いついたように、「盾臣さんと戦つてみたら?」と言い出したのだ。

無論、空閑はボーダーの事情に明るいわけではなく、その「盾臣」という人物が如何なる人物か知らなかつた。

紹介してくれた小南は、「会つてからのお楽しみ」と、慣れない秘密ごとをして、教えてくれなかつた。

戦つて初めて、空閑は悟つた。

「もつと死ぬ氣で鍛えないと勝てない」と。

まあ、相手は攻め手が絶望的にド下手クソなため、勝てていなかつたが。

「そつか。あの人、元玉狹だからね。

そりやあコンタクト取れるか」

「ん？ そーなのか？」

「あれ？ 知らない？ 有名な話だよ。

結婚相手が本部所属だつたから、本部に転向して働いてる：つて話」

結婚。

そう言えば、彼女は左手の薬指に指輪をしていた。

自身のように、黒トリガーと呼ばれる超兵器ではなく、銀色に光る指輪。白い肌に溶け込むようにして鎮座するそれは、戦う相手でありながらも、艶かしく感じたのを覚えている。

見た目と防御技術に極振りしても、痛覚倍増のデメリットは、それらをマイナスにするほど大きいが。

それを受け止めた男とは、どのような存在なのだろうか。

「結婚相手ってどんな人なんだ？ その人もボーダーなんだろ？」

「…えっと、言つても驚かない？」

「おれの知り合いか？」

「ではないね。先輩は本部来るたび、俺と居るから、多分まだ会つてないと思う。だつて俺、『あの人』となるべく会わないようにしてるし…」

と、緑川がそこまで言うと、ある一点に視線を向け、急激に顔を青くする。空閑がそちらを見ると、自身と同じくらいの背丈の少女が、緑川を睨みつけていた。「よオ、久しぶりだな、緑川ア」

「お、お久しぶりですう：」

だらだらと冷や汗を流す緑川に詰め寄るのは、どこからどう見ても『ゾク』にしか見えない少女。

派手な赤色の髪に、夥しい数のピアス。

更には革のジャケットに派手な色のスカートと、どう見ても堅気の人間とは思えない要望だった。

ボーダーの規則として、市民に恐怖を与えない装いというのが条件の中にある。にも関わらず、目の前の彼女は、その規則に喧嘩を売るような装いをしていた。

「最近顔出さねエなつて思つたら、オレとのランク戦そんなに嫌か？なア？」

「いえっ！ 滅相もございません!!」

空閑の『嘘を見抜く』副作用が発動した。

が。ここで口を突つ込めば、緑川がさらに可哀想なことになるのは目に見えていたため、空閑はあえて黙つた。

出来的るチビは、空氣もきちんと読める。

「なら飯のあと來い。久々にランク戦やろオゼ？」

「は、はひいっ!!」

ガタガタ震えながら、緑川がヤケクソ気味に敬礼する。

その返事を聞くと、彼女は満足そうに笑みを浮かべ、踵を返そうとする。
が。即座にその動作を止め、空閑に視線を向けた。

「…んで、緑川。テメエと飯食つてんの誰だア？ オレは謹慎明けで知らねエんだけど」

「今期入ったB級の空閑遊真先輩。俺がボコボコにされるくらいには強い…です」「どーも、空閑です」

空閑がキメ顔で挨拶すると、彼女はまじまじと空閑を見つめながらも挨拶を返す。

「オレあA級フリーの『新田 咲姫』、二十歳の大学生だ。

新田ちゃんでも咲姫ちゃんでも好きに呼べ。

なんなら『サキちゃん先輩』でもいーぞオ。

よろしくな、空閑ア」

「なら、サキちゃん先輩で。よろしく」

A級フリー。ということは、チームを組んでいないとか。

チームを組んでいないA級は珍しいな、などと思いつつ、空閑は奥へと詰め、「こちらにどうぞ」と咲姫を案内する。

咲姫は「おつ、いー子だなア」と笑みを浮かべ、隣に座つた。

見た目はアレだが、人当たりが良さそうな人だ、というのが、第一印象だつた。

であれば、緑川が彼女を異様に恐れる理由はなんだろうか。

空閑が疑問に思つていると、緑川が携帯にチャットを送つてくる。

空閑はバレンタインのようにそちらに視線を向け、メッセージを読んだ。

『盾臣さんの結婚相手。同性婚。攻撃手というより、「殺戮者」。

トリオン量は三雲先輩以下だけど、シンプルな戦闘能力は多分一番上』

同性婚。そんなのがあるのか。

女同士で結婚ができるということは、男同士でも出来るのだろうか。

そんなことを考えながら、空閑は彼女の露出した手を見る。

アクセサリーをかなり着けているのに、左手だけが、薬指にぽつん、と指輪があるのみ。

その指輪は、先日戦った盾臣由紀子のものと、全くデザインが同じだつた。

「おれはスコーゲィオン使うんだけど、サキちゃん先輩はどんなトリガー使うの?」

「孤月とスコーゲィオンの二刀流スタイル。

孤月つつても、ナイフ並みの大きさのヤツが2本と、スコーゲィオンが2本。
トリガー構成はシンプルにそれだけ。余計なもんはいらん」
嘘は言つていない。

空閑はそのトリガー構成での戦闘を思い浮かべ、即座に顔を躊躇めた。

モールモッドくらいなら相手できるだろうが、他のボーダー隊員に勝てるかと問われると、迷わず否定答える。

しかし、目の前の彼女はそれをやつてのけたというではないか。

一体どうやって、と思うも、自身が考えても仕方ないと想い、空閑はその疑問を本人

にぶつける。

「どんな戦い方?」

「そりやあ、コイツとオレのランク戦見てからのお楽しみよ。コイツをボコれんなら、そそこそこ強エんだろう? コイツの次に相手してやつから」この人間を相手にしたことを、空閑は後悔することになる。

◆? ◆? ◆? ◆?

「どこの誰だ、サキちゃん先輩の謹慎に期限設けたアホは」

「太刀川。それは私と知つていて言つてのだとすれば、いい度胸だな」

A級一位、太刀川隊の隊室にて。

隊長たる太刀川慶は、パソコンを前に深いため息混じりに呟く。

その隣で、彼のレポートが進んでいるか監視に来た本部長、忍田真史が青筋を浮かべる。

彼らボーダーが誇る最強の師弟。

だが、弟子には一人、心の底から恐れる先輩がいた。

「サキちゃん先輩の復帰だけは勘弁してくださいよ…。あの人の相手、すつつ…」嫌なんすけど…」

「…私が彼女の被虐嗜好と加虐嗜好に口出しできると思うか?」

「ひぎやく？ かぎやく？」

忍田の言葉の意味がよくわかつてないのか、太刀川は首を傾げる。
とても大学生とは思えない。

彼がボーダーによる推薦で入学した大学は、名門とまでいかなくとも、中堅程度の偏差値を誇るのだ。

以前はdangerを「ダンガー」と読むほどの無知ぶりを見せたのだ。

ボーダーがなかつたら、確実に社会に出ることができなかつただろう。

「……いじめるのが大好きなことと、いじめられるのが大好きなことの意だ」

「ああ、SMプレイ!! サキちゃん先輩だな、確かに!!」

呆れながら、非常に噛み砕いて説明すると、太刀川は「閃いた！」とばかりに思い浮かんだ言葉を口にする。

そういうつた俗っぽい知識は付いてくのに、勉学になるとどうしてこうも不眞面目なのが。

忍田は天を仰ぎ、眉間の皺を押さえた。

「はあああああ…。新田くんとランク戦をしてもらおうか…」

「わかりました!! 真面目にレポートりますんで、それだけはご勘弁を!!」
「太刀川…」

どれだけ嫌なのだ。

別に勝てないわけではない。

何なら勝ち越せるくらいだというのに、どうしてそもそも苦手意識を持つのか。

忍田はそう思考し、自分の立場を太刀川に投影し…2秒で後悔した。

「…確かに、あの子の相手は…その、情操教育に悪い」

◆？ ◆？ ◆？ ◆？

「つはああああああ…♡

いいぜエ、空閑ア…。すつつつ…げエキモチよかつたア…んつ…♡ 思い出してもイキ

そオ♡」

「……………緑川が嫌がる理由、何となくわかつた気がする」

なんだ、この変態。

空閑遊真の中で的新田咲姫の評価は、著しく低下していた。

面倒見はいいし、戦闘に関してのアドバイスもくれる。

更には自身の師、小南桐絵を彷彿とさせるほどに強い。

シンプルな戦闘能力だけで戦っているのにも関わらず、だ。

が。それを差し引いても、このマイナス面が大きすぎる。

傷を受けるたびに艶っぽい声を出し、攻撃を当てるたびにも絶頂した時のような叫び

声をあげるし、緊急脱出が発動した時なんてもう目も当てられない。

新田咲姫は、戦闘技術に関してはボーダーのトップに立っていると思つていい。しかし。しかしだ。

戦場で事を致すような声を出すのはやめてほしい。気が散る。

個人ブースから出ると、皆が気不味そうな顔を浮かべ、空閑たちから目を逸らした。
「…サキちゃん先輩が謹慎になつたのって、これが原因?」

「お? よくわかつたなー。なんか、ジョーソーキョーイクに悪いって言われて」「だろうな。

空閑は微妙な表情のまま、心の中で頷いた。

約一名、エロ漫画から出てきた可能性あり

「…あの、女の子同士でキス…って普通なのかな？」

どんがらがっしやん。

擬音にするならば、この文字列が正しいのだろうな。

そんな事を思いながら、狙撃手訓練担当の東春秋は、事の成り行きを見守る。盛大に転けたのは、夏目出穂という訓練生の少女。

目の前に立つ友人、雨取千佳の言葉に驚き、的のみが並ぶ空間へと転げ落ちていった。
「な、ななな何言つてんのチカ子!?

アタシそんな趣味ないし友達だしでもチカ子はそんな大それた事できる子じやない
のはわかつてるけどそれでも…」

ギリギリ落ちなかつたようで、よじ登ってきた彼女は素つ頓狂な声を上げ、早口で捲
し立てる。

が。その一端を聞いた千佳は、慌てて訂正した。

「あ、いやっ。女の子同士でキスしてたボーダーの人があつから、そういう人も普通に居
るのかなって思つて…」

「…………なんだ。ちよー焦つたアあ…。
チカ子のくせに！この、このっ！」

「わつ、い、出穂ちゃん：」

「こらそこ。訓練後の片付け手伝いなさい」

「す、すみません…」

老婆心というべきか、戯れ合う二人を見守りたい気持ちもあるにはあつたが、東は訓練後の片付けをするように二人に指示する。

二人は頭を下げ、その場の片付けに入つた。

「…先程話題に出たのは、盾臣と新田の二人だろう」

盾臣に新田。

あまり聞き慣れない名前に、二人して疑問符を浮かべる。

「たておみさんと、につたさん？」

「レズカツブルつすか？」

「いや、婚姻関係だな」

東が一人のことを説明したのは、二人が良くも悪くも人を寄せ付けない人間だから。本人はそれぞれる一点を除けば、人格者として好かれている。が。それがあまりに顕著過ぎて、人を寄せ付けないので。

彼女らと親交ある一部の人間は、その事情を鑑みて、機会があれば人を紹介している。東もその一人というわけだ。

「婚姻関係…といつても少し説明がいるな。

日本ではまず、同性婚が認められてなかつたのは知つてゐるか?」

「はい。公民で習いました」

「…………うーわやつべ。テスト出る?」

「雑学程度だつたから、大丈夫だよ」

隊員に学生が多いのも考え方のだ。

出穂は訓練には眞面目に打ち込んでゐるといふのに、授業は身に入つていならしい。

dangerをダンガードと読む大学生に、赤点常習犯のA級3バカの二の舞、いや、三の舞…数えきれない残念な頭の隊員たちを思い浮かべ、東は顔を顰めた。

本格的に学習支援部を設立してもらうよう、上に掛け合おうかと思いつつ、彼は話を続ける。

「実際には『同姓パートナー』という制度を取り入れて、認めてゐる所もあつた。

無論、少数派ではあつたがな」

「ボーダーもその一つですか?」

「いや？そんな制度はないな」

再び、二人の頭に疑問符が浮かぶ。

では、一体どういうことなんだろうか。

「今年、憲法が改正された」

「へ？」

「彼女らが挙式、入籍したのは今年。

唐沢さんに昔のツテを使わせて、漸く認められたらしい。

時事問題として実力テストにも出るだろうから、しつかりと覚えておくといい

その裏では、唐沢克己をあの手この手で脅迫し、昔のツテを使わせた新田の姿が思い浮かぶ。

東も立会人としてその場にいたが、あそこまで冷や汗を流す唐沢を初めて見た。

その日、全てに疲れ切った上司に焼肉を奢つたというのは、記憶に新しかった。

「新田はとにかく、盾臣は会いやすいと思うぞ。あの普段いるドラ○もんみたくずんぐりむつくりな『妖怪重ね着』が盾臣だ。

寂しがりだから、話しかけると飯を奢ってくれるぞ」

「あ、見たことがある。C級ブースでおやつ配つてる人だ」

「そう、それ。後輩との話題作りにと配つてるんだが、あまり効果がないそうでな」

重ね着という言葉で連想したのが、ボーダー基地にいると嫌でも目につく存在。別名『妖怪重ね着』。

あまり近づきたくない見た目なのに対し、C級ブースでお菓子を配るというハートフルなマスコット。

千佳も出穂も、そのマスコットから、のど飴を貰つたことがあつた。

「東さん、今話してんの、盾臣さんのことですかね？」

と。そろそろ片付けも話も終わろうとしたところに、1人の男がやつてくる。

彼の名は佐鳥賢。ボーダーが『顔役』として起用している部隊、『嵐山隊』の狙撃手。余談だが、彼は芸能活動をこなす嵐山隊の中で、最も知名度が低い。

ひどい時には、呼ばれた番組の司会に、名前を間違えられるほど。

容姿は淡麗だが、どこか残念：というのが、佐鳥賢の評価である。

佐鳥の姿を視認した東は、首肯してこれまでの経緯を説明する。

「この子達が盾臣と新田がいやついてるのを見たらしくてな」

「あー…。あの二人、正反対なのにすつげー仲良いんだよなあ」

佐鳥の言葉に、2人は首を傾げる。

正反対、ということは、決して相容れない存在という意味ではないのだろうか。

2人が疑問に思つていると、佐鳥が締まらない笑みを浮かべた。

「じゃ、一回会つてみちやう？」

「新田さんは丁度、空閑くんとランク戦してたみたいだし」

「……アレを年端も行かない子に見せる気か、佐鳥」

「大丈夫大丈夫。木虎曰く、さつき終わつたところらしいですよ。

盾臣さんも三雲くんと来るらしいですし、いいかなーって」

半目で睨みつける東を、佐鳥は冷や汗をかきながら宥める。

千佳と出穂は、どのような存在が待ち受けているのか、戦慄していた。

◆？◆？◆？◆？

「もお！ サキちゃん、お家以外で興奮しちゃダメって言つてたでしょ！」

「あんつ♡ユキちゃんの怒鳴り声エ…♡」

「…オサム。おれ、この体になつて初めて疲れたつて思つた」

「奇遇だな、空閑…。僕もだ…」

空閑と修は、互いに渴いた笑みを浮かべながら、手に持つた缶ジュースを呷る。

その隣で、盾臣と咲姫による戯れあいが発生しており、これまた2人の精神を削つた。

「おい、新田に盾臣。

年端もいかん子供の前で、みつともない真似を晒すなど何度言えばわかる。

三雲に空閑。盾臣は兎に角、新田は何を言つても聞かんが、一応文句を言つておけ」

「あ、はい…」

どんな面子だ。

ツツコミを入れるのを堪えつつ、修は目の前の青年：N.O. 3に立つ風間隊の長、風間蒼也の言葉に頷く。

この場にいる面子は、空閑、修、咲姫、盾臣、そして風間である。

どう考へても違和感しかない組み合わせだ。

風間はランク戦でいろんな意味でやらかした咲姫に、お説教をしにきただけなのだ
が。

しかし、風間の説教は咲姫に対し効果は薄く、聞き流されてしまっていた。

「ンだよ、ノーマルでも迅に勝てねーくせに偉そーに」

「迅に勝てんのは同じだろう。

いい加減、盾臣と組むこと前提のノーガード戦法をやめろ」

「あ？ そのノーガード戦法相手に何本か取られてるテメエが言うか？」

「なんなら今すぐやるかチビ？」

「望むところだ」

互いに火花を散らすのを、修はどこか遠い思考で見ながら、ちびちびとジュースを飲む。

摂取された糖分が、癒しを齎す…なんてことはなく、疲れを余計に自覚することになつた。

盾臣のレイガスト講習は、修にとつてあまり実りはなかつた。

理由は単純。「攻撃を予測しろ」という前提の中の前提となる項目で、修は「今の自分には無理」と判断したのだ。

空閑とのランク戦の記録では、盾臣は正確に攻撃が飛んでくる位置を見極めていた。その域は最早、迅の未来予知にも匹敵する。

修がそのことを疑問に思い、盾臣に問うたところ、「副作用のおかげ」と返された。が。問題はその後だつた。

「結婚相手が謹慎明けたからランク戦に行つてる」と聞き、せつかくなので参考程度に見学に来たのだ。

それが後悔につながると知らず。

盾臣の結婚相手は、女だつた。

少し前に同性婚が法的に認められたというニュースは知つていた：時事問題の一環

として知識をつけていた：が、その事例がボーダーにいるとは知らなかつた。

無論、修は馬鹿にすることなく、素直にその情報を受け入れた。

受け入れられなかつたのは、ランク戦の方だつた。

空閑をノーガード戦法で倒す童女：否、二十歳児：新田咲姫。

それだけなら、「どれだけ強いのか」と驚愕するだけで済んだ。

攻撃してもされても、嬌声をあげて痙攣する仕草さえなければ。

聞けば、謹慎になつた理由は「情操教育に非常に悪いから」らしい。

これでC級やB級クラスだつたら、まだなんとかできた。

しかし、新田はボーダーが誇るA級トップクラスの実力者の1人なのだ。

現在B級2位の影浦隊の長のように、根付さんの顎を殴つたなど、大きな問題を起したわけでもないため、降格はなかつたのが幸いだろう。

「風間さんが乗つちゃダメでしょ。」

「サキちゃんのパンツがぐしょぐしょになつてもいいの？」

「…………その表現はどうかと思うが、盾臣の言う通りだな」

「大丈夫だつてユキちゃん。オレ、下に水着着てるし」

「中にバイブ仕込んでる奴でしょ」

「おう。見られてる中イッちゃダメって背徳感がサイコーのスペースに…」

「公共の場で何してんですかこの人」

かつて、ここまで額の汗腺が仕事をしたことがあつただろうか。

思い浮かべるのは、ボーダーが出している隊員紹介サイトにある「三雲修」の項目。

そこに、「額からよく冷や汗を出す」と、誰に需要があるのか全くわからない情報があつたが、今はつきりと自覚した。

「大丈夫大丈夫。オレ、痛くないとダメだし、我慢できるから」「付いてること自体が問題だと言っている」

「あの、僕たち、中学生なんんですけど……、そういう話題は……あの、ちょっと……」「お、思春期か。じゃあチャット交換しようぜ。オレが使ってるオカズ教えてやるよ」

「やめんか万年発情期。

年端もいかん後輩に貴様の趣味のエロ漫画を送るな。

この間、受け取った緑川が、偶然にも迅と遭遇して泣き崩れたんだぞ」
だから嫌いだつたのか。

緑川が同情的な瞳で、新田に絡まれた自身を見ていた理由を、空閑は完全に理解した。
エロ本というものが何かは知らないが、あまり良いものとは言い難いのだろう。

それは、渋い顔をしている風間と修を見れば、すぐに分かつた。

「えー？ 隊員はほぼ思春期なんだからさあ、もつとがつっこーぜ？」

オレ抜いたら、思春期終わりたての迅くらいだろ、性欲表に出してんの。

浮いた話の一つもない職場つてどーなのよ」

「勘違いするな。貴様と違つて、場を弁えてるだけだ馬鹿者」

「2人がまた口喧嘩を始めるのを傍で見ながら、盾臣が2人に苦笑を浮かべる。
ただし、重ね着に隠れて全く見えないが。」

「この2人、こうなると長いから、もう行こうか。三雲くん、五戦だけでいいかな?」

「は、はい」

「もし私に攻撃が当たつても、あんまり気にしないでね。断末魔みたいな声出すけど」
「それは普通に気にします……」

その後、三雲は普通に負けた。

理由は集中力切れである。